Wolfgang Hilbig: »Ich«. Roman

権力機構と「私」との間に生まれる自己像—喪失と憎悪
——ヴォルフガング・ヒルビッヒの小説 »Ich«——

中　島　裕　昭

かつてミラン・クンデラは，権力が「果てしのない迷宮」という性格を持っているという点を，›das Kafkaeske‹ という語が意味することの第一の相として挙げたことがある。[1] この迷宮に入った者は，この迷宮の果てしない通路の終点にたどりつくことはけっしてない，そして誰がいったい宿命的な判決を起草したのか，けっして知ることはできない。そのような迷宮に類比された権力，あるいは人間と敵対する機構・制度，そういったものが，なぜパリではなく，プラハでその素顔を見せやすいのかという仮定的設問が，クンデラの講演の論理的出発点であった。ヴォルフガング・ヒルビッヒの小説 »Ich« は，そのような迷宮の世界を，文字どおり権力機構の真下から描き出した作品である。ただし舞台はカフカやクンデラのプラハではなく，SED 体制下のベルリン，あるいはライプツィヒ近郊の小都市 A. である。

主人公 ich, er, C., Cambert, W., M. W. (一人の人物にさまざまな名称が与えられているが，これらの「名前」あるいは呼び名の使い分けには著者の一定の意図がある。ここでは便宜的に「私」とする。) はもともとライプツィヒ近郊の小都市 A. の工場労働者であった。私生活で文学に携わっていたが，作品発表の機会はほとんどなかった。その「私」が知り合いのハリーとシンディのところに生まれた子供を形式的に認知する署名を強要される。そのことが契機となり，彼は国家保安省（シュタージ）と接触するようになる。彼の作家としての，周囲のディテールに対する鋭敏な観察力に注目していたシュタージの支援によって，「私」は A. 市からベルリンに移り，文学活動および非公式協力者 (IM) としての活動を続けていくことになる。シュタージの援助によってベルリンでは公的に提供された住居の他に，私的な仕事部屋としてファルベ夫人のアパートの一室を借りることもでき，さらに作品の一部も東西ベルリンで認められるようになる。一方，ベルリンでの彼の監視活動の対象であった作家 R. は，実はやはり IM であり，しかもシュタージからは，西ベルリンの文化関係者とのコネクションを作るという，「私」こそが望んでいた任務を負っていた。自分の存在が R. を IM として活動させて行くためだけのものでしかないと感じた「私」は R. の朗読会に頻繁に出席していた西ベルリンの「女子学生」(実は西ベルリンの編集者である) に R. のことを暴露しようとする。しかし「私」はその直前に逮捕され，ベルリンを追放さ

1) Milan Kundera: Irgendwo, dahinter; in: Die Kunst des Romans. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch) 1989. [Französische Originalausgabe, Paris 1986] (邦訳『小説の精神』法政大学出版局；引用した「そのうしろのどこかに」は 1979 年のメキシコでの講演)

れ，A. 市に戻る。

いわゆる出来事としての物語をこのように時間軸に沿って直線的にまとめたとしても，この小説が伝えようとするものの本質をとらえることはできないだろう。すべては回想の形式で叙述されているが（読む者／聞く者が Sie あるいは ihr で呼びかけられることが数回あり，全体をかつての IM の回想的独白あるいは供述と見なすことができる），その回想は，出来事の時間的継起には即していない。回想される場は，その意味内容と関わりのある別の場・時間に簡単に移行してしまう。例えばベルリンの上司フォイエルバッハの発言は A. 市の上司「チーフ」のそれとの親縁性により，しばしば同時に展開されるのである。彼が落ち着いて考えをめぐらせることのできる主な場は，ベルリンの地下道の末端部（ノルマンネンシュトラーセの真下であり，シュタージ本部の下ということになる）であり，そこは「私」が自分自身に回帰できるところとされる。大きな野菜運搬用の木箱の上に座ってコンクリート壁に寄り掛かった姿勢で想起されていることは，しかし，S バーンのベンチ・シートに座っているときに，あるいはフォイエルバッハとの待ち合わせに使うフランクフルター・アレーの喫茶店にいて窓ガラス越しに外を眺めているときに思い返されていることと，入り組み，交錯している。回想の中に別の回想が入ったり，あるいは突然，新しい回想シーンが括弧だけで区切られて先取りされたり，前に回想されたことが別の場面で想起されて説明されたりする。すべては回想する意識の対象に沿った，いわば飛躍的繋がりの中にある。一種のトランス状態，あるいは夢の中で，過去の場面が断片的に，しかし一定の連想関係を持って展開されるのである。[2)]

まとまりをもった形によるのではないが，しかしくり返し想起されることによって読者の意識に沈澱していくいくつかの回想のモチーフは，東西の体制の中で文学が果している機能，すべての人々が誰か別の人を監視する IM とシュタージ活動の無限の連鎖，DDR の人々の不満，同性愛，DDR で子供を生むことへの嫌悪感ないし憎悪の原因，ことがらを認識することの意味あるいはその可能性，自己を表明することの意味とそのための言葉の発

2) このような回想という形式との関連での叙述の流れをまとめれば，全体はベルリンの地下道にいるところから始まり（最初の章は「行動」»Der Vorgang« というタイトルがついている），この部分の時期を特定することはできない。R. の朗読会の後に出かけたときの回想から物語が始まる。その朗読会の後，フォイエルバッハに会って，逃げるようにアレックスで S バーンに乗り込むところから二つ目の，全体のおよそ五分の三を占める章（「地下での回想」»Erinnerung im Untergrund«）が始まる。この回想は，枠組みとして考えれば，ワルシャワー・シュトラーセで停止した（かつてのベルリンでは休日の晩などによく起こったことである），その S バーンのベンチ・シートでの回想ということになる。「私」が A. 市にいて失踪した子供の認知問題に巻き込まれたところから始まるその回想は，時間的にはおよそ 4 年前，すなわち彼のシュタージとの実質的な関わりが始まった時点までさかのぼることになる。ただし，そのような明確な時間的記述は欠落している。また，この章の中にも地下道の木箱に座っての，ベルリンでの出来事に対する回想が併存している。回想の主なながれがワルシャワー・シュトラーセでの S バーンの場面に繋がるところで，三つ目の章（「解明」»Die Aufklärung«）が始まる。この最後の章では「私」がベルリンを追放されるまでの経緯が，これまでの回想では説明されていなかったことも含めて語られる。基本的には最初と最後の章が一人称形式で，二番目の章が三人称形式で語られている。

見，西側に移住することと東側にとどまることの意味など，さまざまに散りばめてある。

語りの形式，あるいは形式とさえよべないほどまとまりに欠けた叙述の様態は，一方では著者ヒルビッヒの力量不足と言う批判の根拠ともなっているが，しかし明らかに著者の意図するところによるものである。この叙述によって，主人公である「私」の統一的なまとまりをもった像が浮び上がらないという効果が生まれる。ich と er の交代，C., W., Cambert という名前の複数性は，まさに彼の意識の複相性を表現しているのだ。C. または Cambert という名前は権力機構との関係の中で彼が特定される名前であり，W. という名前は，彼にしてみれば彼の私的領域に属するはずの作家としての名前であった。名前だけではない。彼の仕事机も，一つしかないときは二分されており，左側には乱雑に書き散らされた作家としてのメモ，右側にはシュタージへの報告書の下書きがきちんと整理されてあった。地下道の木箱，あるいはシュタージから与えられたのではない私的住居として，彼がフォイエルバッハから逃れるために使用しているつもりだったファルベ夫人のアパートは，彼が「私」に回帰できる場所，胎児の姿勢で眠れる場所であったはずである。しかし作家としての「私」にしても，結局のところシュタージの後ろ楯なしには社会的認知を受けられないとしたら，いったい権力機構から自立した「私」はどこに存在できるのか。フォイエルバッハの予告なしの訪問は，自宅に帰ったときにいつも誰かが自分の部屋に入った形跡があるかのように明りが点いたままになっていることと併せて，「私」の存在が権力機構との関係に完全に従属していることを思い知らせるものであった。「女子学生」の尾行に一度失敗した彼がベルリンでのポストを失いかけ，一時この後ろ楯を失くしたとき，唯一絶対の逃げ場であった地下道の彼の居場所は凌辱され，わざわざ運び込んであったソファは何者かに奪われた。これは，この場所すらシュタージの保護＝監視体制の下にあったことを意味していた。最終的には，個人的関係を持っていたファルベ夫人も，子供の件で救いの手を差し伸べていたつもりであったハリーもシュタージの関係者であるらしいことがわかる。作家 R. に対して彼は，作家としての私的領域において，あるいは監視する側として権力との関係においても自分が優位に立っていると思い込んでいたが，しかしその R. の方がシュタージからは，はるかに重要視される IM であった。このようなシュタージ＝権力の常在性こそが，彼の自己喪失への不安を，あるいは権力機構との関わりの中に自己が解消してしまうことへの苛立ちを募らせると同時に，人々に憎悪を抱かせる原因となっていた。「我々の影としての存在が，我々が常に存在することが，（中略）我々の秘密の実在こそが，この憎しみの原因であり，標的であったのだ，（中略）我々は生の影であり，我々は死だった... 我々は受肉した，影として受肉した，人間の暗がりの部分なのだ，我々は分裂した憎しみだった。»私« が憎しみだったのだ。」[3] この関係性をどこで絶つことができるのか？そのほとんど最後の手段が，この共謀性の連鎖の中から自分を解放する »Dekonspiration« だったのである。

もちろんこのような行動に，彼の自己獲得あるいは自己再生の見込みがあったわけでは

3) Wolfgang Hilbig: »Ich«. Roman. Frankfurt am Main (S. Fischer) 1993. S. 371f.

ない。なぜなら »Realität« は常に実際に社会を支配していた権力機構の側にしかなかったからである。シュタージに保管された文書だけに「現実」を再構成する機能が独占されているわけではないはずだと思いたい。しかし，ではそれ以外のいかなる方法で，W. の考えていること，その行動，そしてその存在そのものの実在性を証明できるのか。現実の社会で何事かをなすためには，程度の差こそあれ既存の力と共謀するしかないという考え方は，すでにこの小説の冒頭で言及されている（この部分だけは現在形で叙述されている）。作家 R. の正体暴露のために「女子学生」に渡したメモは当然のようにシュタージの捕捉するところとなった。つまり「私」は最初の署名以降，つまり公的機関との関係の中での自意識を形成し始めた時点から，つねに権力の保護＝監視の下にあったのだ。彼に影響力を持った他者との関係性の中でしか成立し得ない，複相性を持った「私」を生み出したのは権力機構としてのシュタージであり，いわばシュタージは彼の父親なのである。彼の最初の署名は，シンディの子供の認知という形式的なものである以上に，このような彼と権力機構との父子関係の認知という意味を持っていたのである。シュタージの上司「チーフ」は西側の文学を批判した後に，東側の文学者について次のように言う。「こう言うとひょっとしたら，まるで我々を，ある種特別な一族の創始者であると私が考えているように聞こえるかも知れない... しかし実際我々はそうなのだ。我々がいなくなったらいったい連中はどうするのだ，我々が彼らを抑圧することをもはややめ，検閲することもやめてしまったら，と考えると私は絶望的になる。創造者がいなくなったら，どうするのか。『創造者』... これが言いすぎたと言うのなら，産婆でも，復興協力者でも何でもいいが。」[4)]

最初に引用したクンデラの仮定的設問は，彼の講演の中では次のように答えられている。みずからを神格化する権力はますます集中する，社会活動の官僚化はすべての制度・機構を見通しのきかない迷宮にかえてしまう，そして個人の人格は失われる，そういった性向をカフカは人類の背後に見つけたのだが，現代史は，パリであれプラハであれ，このカフカが発見した傾向を増幅させて，大きな社会的枠組みの中で実現してしまうのだ，ということである。クンデラによれば，「西側」の人々にこの実情が見えにくいのは，西側にこのような事態がないということではなく，むしろ西側の人々が「致命的に」現実感覚を失っているからであり，一方「全体主義国家」はこのような傾向が「散文的・物質的」に誇張された現象形態である，ということになる。ヒルビッヒの小説 »Ich« は，DDR 社会を舞台として，このような現代社会における権力と個人の関係の中で，その機構の中に組み込まれた一個の意識が生まれ育つ，その最深部を観察したものであると言える。

ヴォルフガング・ヒルビッヒは 1941 年，ライプツィヒ近郊のモイゼルヴィッツに生まれ，64 年以降，労働者文学のサークルに属し，詩人として活動したが，東では認められないまま，78 年には西側での作品発表により数週間投獄されて，その後西側に移った。80 年代の後半から小説を含む多くの作品を発表し，とくに 89 年以降，急速に注目を集めている

4) ibid., S. 326f.

作家である。最近では「東のモデルネの守護聖人」[5]という呼ばれ方さえしている。この夏には二冊の概説的紹介書も出版された。[6]ライプツィヒ近郊で労働者として働いていて，ビッターフェルト政策の中で文学との関わりを深める，しかし発表の機会も評価もなかなか得られず，ベルリンに移って非公認文学シーンに位置し，西側での出版の可能性を探るという作家の経歴は，この小説の主人公と著者ヒルビッヒが共有しているものである。そして作家と DDR の政治体制との関係の中での作家の自己認識の問題という点では，バッハマン賞を獲得した 1989 年の小説 »Eine Übertragung« の内容と重なっている。この作品も労働者文学の出身である作家 C. の物語であり，小説 »Ich« とは人物名も一部一致している。しかし語りの形式はここまで複雑ではなく，IM やシュタージの問題とは絡み合ってはいない。IM やシュタージの問題を組み込むことによって，この小説独自のモチーフ，すなわち権力機構との父子関係の認知というモチーフが可能となった。言わば前作の内容を取り込んで，より深化させているという意味で，この小説が，これまでのヒルビッヒの著作内容を総括するものであるという見方も不可能ではないだろう。

Frankfurt am Main (S. Fischer) 1993, 380 頁

5) Die Zeit, Nr. 41 am 7. Okt. 1994.

6) Text＋Kritik, Nr. 123: Wolfgang Hilbig. München (edition text＋kritik) 1994; Materialien zu Leben und Werk. Wolfgang Hilbig. Hrsg. v. Uwe Wittstock. Frankfurt am Main (S. Fischer) 1994.